
ALIVE

清 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ALIVE

【Nコード】

N5312Z

【作者名】

清涼

【あらすじ】

その話をしていたらそこへタイムスリップしてしまった。そこは幕末の京都。言わずと知れた新選組、史実にはない隊士たちの生存説があった。「サバイバル」に続く司と晃一の悪運コンビが往来する物語。

第一章（一）

「そついやこの辺だな」

ふと思い出したかのように立ち止まると、辺りを見渡した。

色とりどりのネオンが柳のしなる夜道を映し出している。小川の流
れがきらきら反射して涼しげに、ここ京都は木屋町の繁華街を雅に
感じさせていた。東の近代的な都と違い、やはり歴史の深い街だけ
はある。通りを挟む木造りの塀や石畳などがネオンに照らされなが
らもひっそりと情緒溢れる空気に包まれていた。

情だろつか、初夏の蒸し暑さすら風情に溶け込み、月明かりを探し
たくなっていた。

「何が？」

不意に立ち止まった司の一步前で晃一が足を止めて振り返ると、懐
かしそうに辺りを見回している。そして目が合うと、

「今何時？」

と、聞かれた。

「？」

一瞬呆氣に取られたが、先程した自分の質問より司の質問に対する
答えの方が早いと判断すると、腕時計に目を落とした。

「10時10分」

「お、もうそろそろか？」

「は？」

晃一は訳が分からず怪訝な顔を見ると司の顔を覗き込んだ。

「何が？」

もう一度、今度ははっきりと聞く。

「池田屋事件」

「は？」

真顔で答える司に晃一は再び呆氣に取られて、「池田屋？」と、聞

き返した。

「そ、池田屋」

司は人差し指を立てると頷いて答えた。

「それがどうしたんだよ。池田屋って言えば、あの新選組が討ち入って騒動起こしたっていう、あれだろ？」

「そうだよ。それで維新が1年か2年遅れたって。あら？ お前でも知ってたの？」

「・・・。当ったり前だ。とりあえずそれくらいの歴史は誰でも知ってるって」

いつも馬鹿にされている晃一は、自分とは頭の中の構造が違いすぎる司にこれ以上反論する事が出来ない。それに関してはすっかり諦めているが、とりあえず自分が日本史専攻だった事を思い出した。

「元治元年、6月5日」

「今日だ」

「今日？ 今日では7月8日だぞ」

「旧暦だからな、6月5日ってのは。1864年7月8日だ」

「ほお」

「多分この辺りだ。その池田屋があったのは」

言いながら司はサングラスを外すと、辺りを見渡し夜空を見上げた。

変わらないのは空だけか

いつだったか、どこかでそんなセリフを吐いた覚えがある。

少し生温かい風が頬を撫でるように受けたが風は吹いていない。

少し不思議に思い夜空を見上げると、ほんの少し赤い下弦の月を見つけた。

歴史が動いたこの空の下を何故か不意に想像していた。

幕末の動乱前の今日のこの夜空の下で何が起こきたのだろう。

『新選組』、幕末に突如現れた武装集団で階級を持たない者の集まりだ。京の町では人斬り集団でヤクザ同然の扱いだ。維新後は賊軍

の中でも卑劣な者として挙げられ、その名を出すことすら罪だった。だが今では、幕末の志士の一人としても見直されている。武士ではない者達が武士の生き様を崇め、武士になろうと抗う生き様を描く者もいるのだ。

最後の武士にして最強の武士の集団、そうも言われている。

と、突然、近くで数人の甲高い騒ぐ声が聞こえて来る。

居合いの声だろうか、剣の交える音も聞こえて来そうだ。

幻聴か？

耳を澄まそうとした時、「ヤバイっ、逃げろっ！」と、晃一に腕を取られ、ハッと我に返った瞬間走り出していた。

居合いの声ではなく、司達を見付けたファンの奇声だったのだ。

ここ京都でのコンサートを終え、珍しく他のメンバーと分かれて司と晃一は二人で食事をしたのだ。先斗町で酒を酌み交わしながら、そう言えばこの辺りでは幕末の志士達が同じように生きていたのだという話で盛り上がった。

外に出ると、車のエンジン音に混じって鴨川の音を少し遠くに聞きながら無意識の内に三条小橋付近まで足を運んでいた。そしてふと、司は新選組を思い出したのだった。

「こっちだっ」

細い路地に逃げ込んだ。

地方公演の後にぶらぶらするのはいつもの事だったが、ファンに見付かった時は必ず逃げる。これもいつもの事だった。

自分達の時間を誰にも邪魔されたくないからだ。

「お、司、ここに穴があるぞ」

考えるまでもなく二人は体を屈めると、暗い穴に入って、彼女等が何処かへ行くまで息を潜めていた。

第一章（一の二）

タタタタ・・・

数人が走り去って行く音を聞き終えると、二人は同時にホッと息を吐いた。

「行ったか？」

「みたいだな。・・・、にしてはすつげえ真っ暗」

ようやく自分達が入り込んだ穴について考えると首を傾げてしまった。

この穴は一体何だろうか？

コンクリートの壁に掘ってあったのだろうか。それとも門の一部だったのだろうか。

「・・・、にしては・・・、ん？」

司は穴から出ると体を伸ばして首を傾げた。晃一も続いたがやはり同じように首を傾げる。

「・・・。なんか、ヤケに静か、だな」

高い木の塀に挟まれた路地に二人は立っていたが、辺りを見渡して、先程のコンクリートに囲まれた暗さとは全く別の暗さを感じていた事に気が付いた。

「何だ？」

屋根？

夜空を見ようと見上げたが何かに阻まれている。余り見かけないが、明らかに屋根だ。それも木造で両側から伸びている。よくよく考えなければ何の違和感もない。

とにかく今は、自分達に降りかかった難から逃れたのだ。安心していい筈だ。気を取り直して通りに出ようと視線を何気に落とすと、

再び首を傾げてしまった。

？

革靴にかかる感触が妙に柔らかい。少しためらったが、思い切って通りに出ようとした所で、思わず息を呑んで立ち止まってしまった。

「えっ！？」

「ちよつと」

後ろから晃一がぶつかりそうになって、片手で司の背中を押さえた。

「どうした？」

「あ・・・、いや・・・」

司は立ち止まったまま目の前の景色に理解出来ず、晃一に振り返った。

「あん？」

暗がりの中、余りに驚きを隠せずにいる司に不思議に思った晃一が、隣に立つて通りに出ようと、司の肩に手を掛けながら一歩前に出た。

「はあっ！？」

言ったきり開いた口がふさがらない。思い切り息を飲み込んで目を見開いた。

「何だ、ここ？」

気を取り直した司が通りに出て辺りを見渡す。

家屋^{かおく}から漏れる灯りはあるものの、今までの色とりどりのネオンがすっかりなくなっている。それどころかコンクリートのビルは一つもなく、街灯さえない。

そして道路は、アスファルトではなく、剥き出しの地面になっていた。

それにしては何処^{どこ}かで見た事のあるような風景だ。

「なあ、司」

思い出そうと考えた時、隣に立っていた晃一が少し安心したような声を出した。

「ここって何かのドラマか映画のセットか？」

「え？」

「だってこれ、思い切り時代劇のセットだろ。しかもここ、京都だし」

「は？・・・映画村？」

「にしか思えないけどな・・・」

「けどなって・・・でも、まあ、そう、だよな・・・」

「うーん・・・」

晃一は腕を組んで黙ってしまった。

いつの間にこんな所に来てしまったのだろうか。先程まで自分達はビルに囲まれた繁華街に居たのだ。いくら風情のある街並と言えども、遠くには車の騒音が聞こえるし、さすがにこれだけの星が見られる程暗くはなく、恍々と電気は付いている。

それが妙な穴から出たとたん、まるで江戸時代にタイムスリップしてしまったかのような光景だ。

映画やテレビを通して見たところでここまで暗くはない。なぜなら、それなりに照明というもので照らされているからだ。

しかし・・・。

どう考えても、ここにはいわゆる「電気」を使つての照明はなく、どう見ても提灯等の火の灯りしかない。確かにほんのりと妙に懐かしさや情緒を感じてしまう灯りだった。

「映画村までワープしたか？」

晃一にはそれくらいしか思い付かない。それが、まさかとは思うが・・・。

「それとも・・・タイムスリップか？」

「は？」

さすがにこれには司も啞然としてしまった。

「まさかぁ・・・」

司は呟きながらはす向かいにぶら下がっている木の看板に視線を移した。

そしてそのまま何気に建物の二階へと目をやった。木の格子と障子の向方にはろうそくの灯りが揺れて数人の気配がある。

再び看板に目を落とした時、何か得体の知れない戦慄が走った。

そして、そこに書かれた文字を読んだ時、体中に電流でも走ったかのような悪寒が走り、息を呑んだ。

が、それと同時に、鋭く殺気立った人の気配を感じて二人は慌てて先程の路地に身を隠した。

・・・

つもりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5312z/>

ALIVE

2011年12月22日12時48分発行